

実践まとめシート（１年次）

研究グループ	地域と協働	実践グループメンバー	三橋、對馬、野村
--------	-------	------------	----------

実践タイトル			
『中学部における「紡績作業を通じた地域と協働した作業学習」の実践』			
<p>I はじめに</p> <p>作業学習は、生徒の働く意欲を培いながら、将来の職業生活や社会自立に向けての基礎となる資質・能力を育むことに重点を置き、総合的に学習する活動である、とされている（文部科学省 2018, p.34）。作業学習を通して地域協働に参加することは、社会性の向上、自己肯定感の向上、技能習得の機会の提供、地域社会との結び付きの強化など様々な効果が期待できるとされ、本校中学部の作業学習の改善と発展的展開の可能性を探ってきた。（小枝、2022）</p> <p>中学部の作業学習は、農工班と手工芸班の2つのグループで活動している。農工班では、紡績作業を中心に、ワタ、ベニバナ、アイ、ヒマワリなどを栽培し、糸作りと染色、搾油を行い、染色した糸は手工芸班の製品に活用している。さらには、この活動を交流及び共同学習の題材としてワタの紡績と藍染めを実施することを予定している。この交流及び共同学習を通して、地域協働の視点から、どのような効果が期待できるかを検証したい。また、地域との関わりを深め、より発展的な可能性を探るためにはどのような取り組みが考えられるかを探っていきたい。</p>			
II 実践方法			
<p>1 対象児童生徒・学級・学習グループについて</p> <p>対象となる生徒は、中学部作業学習農工班の生徒（1年2名、2年3名、3年3名）計8名である。知的障害の他に、自閉スペクトラム障害や注意欠陥多動性障害を併せ有する生徒が所属する。作業学習では、継続して綿の加工作業（糸づくり、搾油、種と綿の分離作業）に取り組んできた。</p> <p>2 実践の手続き</p> <p>本校中学部の作業学習では、農工班と手工芸班に分かれ、それぞれの作業に取り組んでいるが、互いに協力しながら製品開発を行っている。特に農工班では、紡績作業を中心とした作業内容が増えたため、作業工程を細分化し、より個別の実態に合わせた活動を役割分担して行うようにした。</p> <p>今回の実践では、作業学習で取り組んできたワタの紡績・搾油活動を行い、その手法を他者に教えることで、作業学習そのものへの意欲を高め、地域（他者）とのつながりの拡大を図ることができないかと考え、附属小学校の児童47名（複式学級1～6年生）を対象に教える活動を行うこととした。</p>			
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>実践のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域と協働する場面として、作業学習で取り組んでいたワタの紡績・搾油活動を行い、その手法を他者に教える場を設定する。 ・生徒の作業への意欲を高め、地域（他者）とのつながりの拡大を図る。 </div>			
<p>効果の検証では、交流前後の生徒へのアンケート調査結果の比較、交流時の生徒の発言内容や行動の見取り、授業中のエピソード記録、交流後の附属小学校児童の感想の検証を行った。</p>			
III 指導の実際			
<p>1 日程</p> <p>（１）事前アンケートの実施（令和4年10月19日）</p> <p>（２）附属小学校での交流及び共同学習（令和5年1月26日）</p>			

- ・附属小学校の教育課程上の位置づけは総合的な学習の時間である。
- ・作業学習の時間に生徒が担当している仕事内容で綿繰り班、搾油班、紡績班の3グループに分かれて交流及び共同学習を2時間行った。

(3) 事後アンケートの実施(令和5年1月28日)

2 附属小学校での交流及び共同学習の実践

【綿繰り班】

- ・綿繰り班は本校生徒3名が附属小学校複式学級1・2年生16名の児童にコットンボールからの^{しゅくそんがく}宿存萼と^{さく}朔の分離するための綿繰り機の操作方法(本校生徒2名担当)やハンドカードを使って綿うちをする方法(本校生徒1名担当)を教えた。



○生徒の様子

- ・初めは教師の言葉掛けで綿繰り機の使い方の手本を本校生徒が小学校の児童に見せた。学校での作業と同様の手順で行うことができた。児童から「すごい」の声がでると嬉しそうにしていた。
- ・見本を示した後は、教師の言葉掛けで綿繰り機が動かないように押さえる活動を行った。順番に取り組む児童の様子を見て、自分から「ワタがでてきているよ」「上手だね」「ここを押さえるといいよ」などの言葉掛けを行っていた。また、作業途中に児童が困っていると「ちょっと貸してね」と話して、見本を示していた。
- ・終始、分からないことがあると教師を呼び、確認しながら作業を進めていた。

【搾油班】

- ・搾油班は本校生徒2名が附属小学校複式学級3・4年生16名の児童にワタの種を搾油機に入れ、搾油を作るやり方について教えた。

○生徒の様子

- ・授業開始前から「緊張する」「恥ずかしい」を繰り返して話していたが、教師の促しにより、搾油機に種を入れるよう説明しながら見本を見せていた。
- ・使用していた道具を積極的に片付けたり、「楽しかった」と笑顔で話したりしていた。
- ・声の大きさを調整し、大き過ぎず適切な音量で、整列するように16人全ての児童に対して言葉掛けをしていた。指示が伝わらなかった児童には、「こちらに一列に並んでください」と分かりやすく言葉掛けをしていた。
- ・搾油機の不具合を見つけ、すぐ教師に報告した。搾油機の不具合(粒数の多さで目詰まりを起こし、機械が回転しなくなる)を見て、児童に対して(授業で行っている通常とおりの量)粒数とタイミングを繰り返して言葉掛けをしていた。

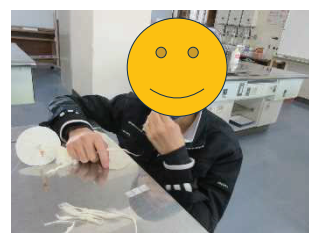


【紡績班】

- ・紡績班は本校生徒3名が附属小学校複式学級5・6年生15名の児童に綿から糸を作る方法について教えた。

○生徒の様子

- ・最初は、やり方を説明しながら手本を示していた。教師からの言葉掛けはほとんどなくても、一緒に作業をしながら進めており、小学生に合わせてゆっくり教えていた。徐々に小学生から質問が出るようになり、どうすればうまくいくかを口頭で説明するようになった。



- ・どうしてもうまくできない児童には、後半は個別に教えていた。児童からの反応は薄かったが、じっくりと丁寧に教えることができていた。教える際は、優しい口調を心掛け、言葉を選びながら、ワタを持つ手の位置や巻き取り方などを具体的に教えることができていた。
- ・質問をたくさんする児童からは、「〇〇さん、教えてください」と名前を呼ばれていた。それに対して、「〇〇さん、こうすればいいよ」と名前を言いながら教えていた。
- ・児童からの質問が多かったが、一つ一つ丁寧に教えていた。説明がうまくいかないときは、教師を呼んで、説明の仕方を確認した後、児童に教えることができた。
- ・児童が黙々と作業をしているときも、「そうそう」「上手だね」「うん、いい感じ」など、褒めながら活動を見守っていた。児童たちは楽しそうに作業に取り組んでいた。

Ⅳ 結果

1 本校の生徒のアンケート

- ・事前（令和4年10月19日）、事後（令和5年1月28日）に生徒へアンケートを実施した。
- ・図1及び図2は、交流及び共同学習後に実施した本校生徒のアンケートの結果を示したものである。

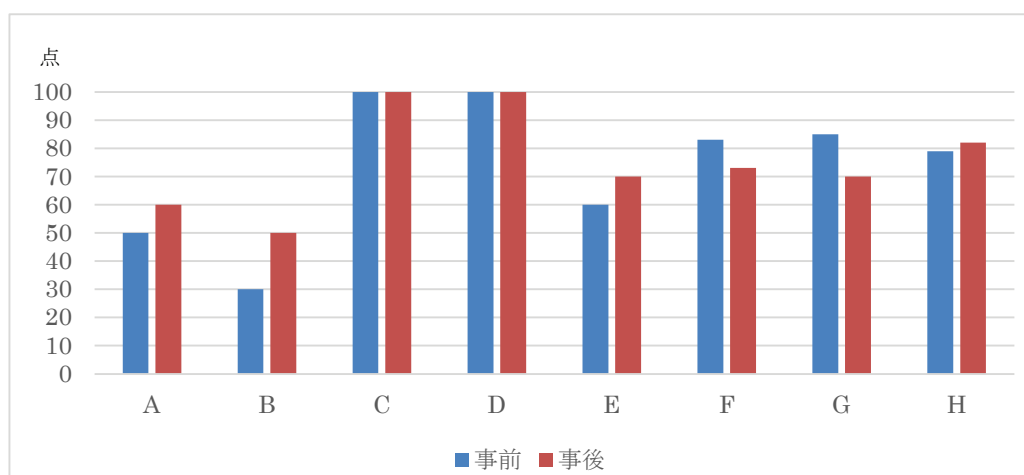


図1 Q1 作業学習は好きですか。点数をつけると100点中何点？

	事前	事後
A	まあまあ好きだから	まあまあ好き
B	好きでも嫌いでもない	なんとなく
C	染色が好きだから	作業が好きだから
D	わたとりが好きだから	作業が得意だから
E	作業はお仕事の練習にもなるので、できればもう少し時間を長くしてほしい。	作業内容はとてもいいのですが、一緒にやる人の組み合わせを変えてみたらもっとよかった。
F	紡糸がうまくできたときに嬉しいから。でもうまくいかないとイライラするから。	たまたま紡糸で失敗を続けてイライラしてしまうから。
G	物作りをすることが好きだから	附属小学校の生徒に糸の作り方を教えることがあんまりできなかったから。
H	手作業が苦手だけどやりがいがある	そこまで紡糸は教えられなかったが、ちょっとだけ大事なことを教えることができました。

図2 Q2 点数の理由は？

- ・Q1より1・2年生は点数が高くなる又は満点だったが、3年生の2名（F・G）は減少していた。Q2の点数の理由より、1・2年生は、交流及び共同学習を通して、達成感を感じたのではないかとと思われる。点

数が減少した生徒は、「たまに紡糸で失敗を続けてイライラしてしまうから」、「附属小学校の生徒に糸の作り方を教えることがあんまりできなかったから」と答えていたことから、3年生は任される仕事の難易度が高くなっていること、自分の目標としていることの到達点が高かったため、点数が低くなったのではないかと推測される。

	事前	事後
A	ていねい	ていねい
B	ていねいに取り組むこと	集中すること
C	時間いっぱい働く	糸が切れないように優しくまく
D	時間を守る	糸と綿を混ぜないように気を付けている
E	仕事態度に気を付ける	先生に注意されないように態度や作業の集中力に気を付けています。
F	集中力がきれないように気を付けている。	集中がとぎれないように集中すること
G	ていねいに作業すること	糸を引っ張り過ぎないように糸を作ること
H	集中力が切れないようにする。	集中力が切れないようにして、ていねいに作ることです。

図3 Q3 作業で気を付けていることは？

- ・Q3より、事前と事後を比較するとより具体的な内容の目標を記述する生徒が増えた。

A	やさしく話す
B	わかりやすく説明
C	搾油の時に少しずつ綿の種を入れる
D	男の子たちと女の子たちに教える
E	わかりやすく大きな声で教えること
F	わかりやすくなるべく丁寧に教えること。なるべく自分からコミュニケーションをとって教えること。
G	やさしく教えること。分かりやすく教えること。
H	大事なことを頭の中で考えて、アドバイスをしました。

図4 Q4 附属小学校で教える時に気を付けたことは？

- ・Q4より相手に分かりやすく伝わるように意識して取り組んだ様子が見られた。

2 交流後の感想

- ・図5は、交流後の本校生徒の感想、図6は、附属小学校の児童の感想の一部を記載した。

A	楽しかった。
B	ハンドカーダーをやるのが上手になった。
C	最初は緊張したけれど附属小学校の3，4年生に上手く言えました。
D	綿取りを自分でやるようにしたい。
E	小学校の人に油がしっかりとれているところを見せたかったが、機械が何回も止まって結局いいところを見せれずに帰りました。次、この機会がありましたら、前回の反省を生かしてやりたいと

	思います。
F	自分から話しかけて緊張をといてやさしく教えるのがいいと分かりました。
G	附属小学校の生徒に糸の作り方を教える時に少し緊張しました。
H	交流後は、楽しく教えることができ、満足しましたが、もうちょっと緊張がなくなったら、全部教えることができるようになったかもしれません。

図5 交流をした本校生徒感想

綿繰り班（附属小学校複式学級1・2年生）	
<ul style="list-style-type: none"> ・お世話になりました。ワタの種のとり方やごみとり、それからハンドカードのやり方をいろいろ教えてくれてありがとうございます。最初は、難しかったけどだんだん楽しくなってきました。教え方がとてもわかりやすかったです。 ・私たちが知らないこと、初めてなこと楽しい時間を作ってくれてありがとうございました。私が一番うれしくて楽しかったのは、ハンドカードです。最後のふわふわのできあがりが見たくて、最後のできあがりをさわってみたらふわふわをこえるくらいふわふわでした。みなさんがんばってくれたことが伝わりました。本当にありがとうございました。 ・わからなかったこともありましたが、よく、わかりました。ちゃんと教えてくれたおかげです。ありがとうございました。またいつか、やりたいです。 	
搾油班（附属小学校複式学級3・4年生）	
<ul style="list-style-type: none"> ・搾油を教えていただきありがとうございます。初めての貴重な体験になりました。楽しただけでなく、機械もおもしろくて、ずっと見ていられました。教え方も丁寧で、とってもわかりやすかったです。 ・綿の紡績・搾油などのやり方を教えてくださりありがとうございます。詳しく教えてくれたり、アドバイスとコメントを言ってくれたりしてぼくは楽しかったです。 ・搾油のやり方をわかりやすく、丁寧に教えてくださりありがとうございます。種を入れすぎるとつまることや種をぬらしてから搾油することなどがよくわかりました。 	
紡績班（附属小学校複式学級5・6年生）	
<ul style="list-style-type: none"> ・糸を紡ぐことを教えてくれてありがとうございました。初めは上手くできなかったけれど、手で糸を作るときは「片手で引っ張るんだよ、あまり細くしなくて良いよ」とコツなどを優しくアドバイスしてくれました。すごく難しかったのに中学部の人たちはすらすらやっていてとてもびっくりしました。最後まで糸を作ることができなかったのは残念だけど、中学部の人の方が家でやってみてねと言ってくれたので頑張ることができました。これからも頑張ってください。 ・ワタのごみとりや、搾油、糸つむぎの工程を丁寧に教えてくださって、ありがとうございました。私たちが上手に出来なかったら「最初はみんなそうだから、大丈夫！」と慰めてくれたり、コツをつかんできたら「すごい！上手に出来てる！」と褒めてくれたりしてとてもうれしかったです。これからも勉強を頑張ってください。 	

図6 交流をした附属小学校児童の感想（原文のまま記載）

- ・図5の感想より、相手に合わせて教える話し方や関わり方について気が付いたことや次に教える機会があればどのようにしたいかが記述されており、生徒自身が活動を振り返ることで、自己理解が深まったのではないかと考えられる。また、図6の交流をした児童からの感想に、本校生徒の教え方や関わりを肯定的にとらえた記述が多くあった。このことより、今回の実践は相互にとって意義のある活動になったのではないと思われる。

V 考察と課題

今回の実践を通して、ねらいとして掲げていた地域と協働する場面として、作業学習で取り組んでいたワタの紡績・搾油活動を行い、その手法を他者に教える場を設定することで、生徒の作業への意欲を高め、地域（他者）とのつながりの拡大を図ることは、一定の成果を得ることができた。他者に自分たちの普段行っている作業を教えることで、人との関わり方の幅が広がり、「分かりやすく作業内容を説明するにはどうすればいいか」などと相手を意識した話し方を生徒自身が考えるきっかけとなっていた。

また、交流後のアンケートや感想から、作業学習への意欲が高まったことや他者へもっと伝えたいといった意見が多かった。自分たちが作業学習で学習してきたことを、地域（他者）に伝える活動は、結果として生徒が感謝や称賛を受けることで自信となり、生徒が普段の作業学習への達成感や充足感を感じ、それがより作業学習への意欲を高めることにつながったと考える。

今後も、地域の人たちへ教えたり販売機会を設定したりし、地域の人と継続して関わることで、関係を作り、深め、自分の思いをさらに表現できるようになっていくのではないかとと思われる。

VI 参考・引用文献

文部科学省（2018）『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）』開隆堂。
小枝洋平,勝川健三,上之園哲也（2022）「知的障害児とワタ栽培・紡績に取り組む方法」『クロスロード』第26号, 弘前大学教育学部研究紀要, pp.101-107.